

## 各論編 (1)

### 現代社会における「新たな」部落差別の様態・言説

阿久澤麻理子

大阪公立大学 人権問題研究センター

#### はじめに

差別は変容する。それは、差別が「する側」の恣意によって、作り変えられるからである。国際人権条約に示された「差別」の定義を要約的に言えば、「人の属性・特性を理由に、区別・排除を行い、人権の享有・行使を妨害すること」であるが<sup>1</sup>、言うまでもなく「区別・排除」し、権利の行使を「妨害する」のは、差別「する側」である。

それゆえ、人権教育・啓発は差別「する側」であるマジョリティの意識・態度に働きかけるし、差別禁止法制は「する側」の行為を規制する。これらが、差別のない社会を実現するための重要な取り組みであることは言うまでもない。だが、差別は「する側」の恣意によるので、社会の変化に応じて、「する側」はこれを作り変える。こうして差別は、新たな手段や言説を獲得し、「再生産」される。

例えば近年、各地の自治体が実施している人権についての市民意識調査の結果を見ると、結婚において部落出身者を忌避する意識より、住宅を選ぶ際、部落内にある物件を忌避する意識のほうが、数値の上では高い割合となる傾向があるが、これは、差別「する側」が「部落の土地(地名)」を、部落出身者を判定する基準に利用するようになったことと関係する。明治以後、手数料を払えばだれでも第三者の戸籍を閲覧することができたので(1872年に編纂された壬申戸籍の一部には、旧身分がわかる記載や、所属する寺社の記載などもあったので)、身元調査は戸籍を利用して行われた。だが、壬申戸籍の公開禁止(1968)、戸籍の閲覧制度の廃止(1976)により、系譜を辿る調査ができなくなると、部落地名総鑑事件(1975)で明らかになったように、住所・本籍地等を部落の所在地情報(部落の地名リスト)と照合し、一致すれば出身者と判定するなど、地名に依拠する傾向が強化された。これは、封建時代に身分統制による区別が進み、被差別身分に置かれた人びとは特定の役負担を負うとともに集落(かわた村など)を形成したことから、差別は人(身分)に対して向けられるとともに、コミュニティ(土地)に対しても一体的に向けられ、それらの集落が、今日の部落と一定、重なるからである。つまり、人の系譜が遡れなくなると、土地との関係を手がかりに出身者判定をしようとする。その結果、自治体の人権市民意識調査において、部落内の物件に住むことを「避ける」と答えた者に理由をきくと、実にその 1/4 が「住めば、自分も出身者とみなされるから」と答えるケースもある<sup>2</sup>(阿久澤 2021)。これは、人権施策の進展(戸籍の閲覧制度の廃止)によって起きた変化とも言える。

また、部落の土地に対する忌避意識は、地価にも跳ね返る。「部落の不動産は値上がりが見込めず、転売が難しい」といった書き込みも、意識調査の自由回答欄にしばしば見られる。部落の土地を忌避する際の、「みなされる差別」の

<sup>1</sup> 人種差別撤廃条約、女性差別撤廃条約、障害者権利条約に示された、差別の定義は共通している。これらの条約では、差別は「人種・肌の色・世系・民族または種族的出身」「性」「障害」に基づいて行われる区別や排除・制限であり、「人権及び基本的自由を認識し、享有し又は行使することを妨げ又は害する目的又は効果を有するもの」である(障害者権利条約では、これに「合理的配慮の否定」が加わる)。

<sup>2</sup> 例えば、堺市市民人権局人権部人権企画調整課(2016)『第7回堺市人権意識調査報告書』、同(2021)『第8回堺市人権意識調査報告書』。

回避や、財産の保全といった理由はいずれも、差別「する側」の勝手な論理が作りだしたものに他ならない。

また、自治体による市民意識調査の最後には、自由回答方式で「ご意見欄」が設けられることが多いのだが、そこには、同和对策事業や各種人権施策、さらには生活保護制度をターゲットにして、これらが「やる気のない者に特権を与えている」とか、マイノリティは「差別があると主張して、制度に付け込む『ずるい人』」だといった主旨の書き込みも散見される。このような「特権言説」は、日本だけの話ではなく、アメリカでは積極的差別是正措置（アファーマティブ・アクション）の進捗と共に顕著になり、「差別はもう深刻な問題ではないのに、マイノリティは努力もせず、要求ばかり行い、不当な特権を得ている」といった主張が、聞かれるようになっていた。このような言説は、人種間には生得的な優劣があるというような「古典的差別（レイシズム）」とは区別され、「象徴的レイシズム（symbolic racism）」（Kinder & Sears, 1981）<sup>3</sup>、「現代的レイシズム（modern racism）」（McConahay, 1986; 高, 2015）と呼ばれる。日本における「同和利権」「在日特権」などの言説も、同種のものと言えよう<sup>4</sup>。

こうした「新しい」現象や言説は、人権施策の進捗と共に立ち現れたものであり、その成果を無意味化したり、「政策批判」の装いをまといながらマイノリティを貶めたりする。日本では、2000年以降、ヘイトスピーチと共に、こうした言説がインターネット空間で数多く発信されるようになった。

このように、現代社会において変容する差別（手段・言説）に抗する主体を形成することは、人権教育の今日的課題である。そこで本稿では、若者世代が、こうした「新しい」現象や言説からどのような影響を受けているのかを検討する。本稿では、以下の手順に従って分析を進める。

## 1. 「部落出身者(人)」と「部落の土地」に対するとらえ方の差異の検討

### 1-1. 「差別の現状認識」(社会に差別があると思うか)

### 1-2. 「忌避的態度」(自分は差別するのか)

#### ① 結婚・住宅(土地) ② 職場・近隣

### 1-3. 「差別の現状認識」から「忌避的意識・態度」への転換

### 1-4. 教育経験との関係

## 2. 日本型「現代的差別(レイシズム)」の検討

### 2-1. 「現代的差別」「古典的差別」を測定するための質問について

### 2-2. 部落・部落出身者に対する意識

### 2-3. 「現代的差別」「古典的差別」尺度(スコア)の作成(因子分析)

### 2-4. 「現代的差別」「古典的差別」と忌避的態度の関係(相関)

### 2-5. 「現代的差別」意識を形作るものは何か

ネオリベラリズム志向性、保守的政治志向性、ネット利用度など

## 3. インターネットの影響

<sup>3</sup> アメリカでは、積極的差別是正措置はアメリカ社会の象徴的(symbolic)な価値観(アメリカンドリームに象徴される個人の勤勉と努力、実力主義、そして自由)に反するから許容できないという主張がある。つまり、「象徴的差別」の語には、アファーマティブアクションの受益者になるようなマイノリティは、伝統的な白人の価値観に反する、という意味が込められている。

<sup>4</sup> 日本政府が在日コリアンに、積極的差別是正措置を実施したことはないので、「在日特権」言説は、こうした政策に対する批判というより、差別の撤廃を求めて声をあげるマイノリティの行為(社会運動)じたいを、特権の要求とみなしバッシングする言説といえるであろう。

※ なお、分析対象は、部落問題を「知っている」1,109 人である。【問 3】で「同和問題(部落問題)を知らない」を選択した者と、「回答なし」は除外して集計を行っている。

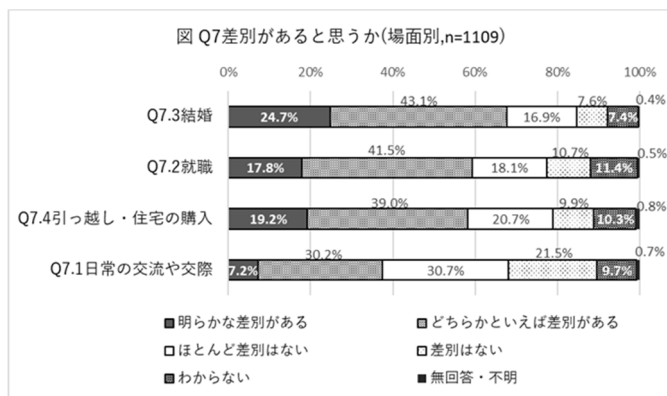
## 1. 「部落出身者(人)」と「部落の土地」に対するとらえ方の差異の検討

### 1-1. 「差別の現状認識」(社会には差別があると思うか)

「社会には部落差別があると思うか」と、「自分は部落差別をするのか」は、位相の異なる問いであるが、本調査ではこの両方をきいている。まずは前者(「社会には部落差別があると思うか」すなわち部落差別の現状認識)を取り上げる。

【問 7】では 4 つの場面——「日常の交流や交際」「就職」「結婚」「引っ越し・住宅の購入(同和地区・周辺の物件を避ける)」——をあげ、部落差別があると思うかを 4 件法(「明らかな差別がある」「どちらかといえば差別がある」「ほとんど差別はない」「差別はない」から1択)で聞いている。

結果を要約的に見るために、「明らかな差別がある」「どちらかといえば差別がある」を合算し、「ともかくも差別がある」、「ほとんど差別はない」「差別はない」を合算し「差別はない」として表にし、「ともかくも差別がある」の割合が高かった順に図に示した。「ともかくも差別がある」の割合は、「結婚」(67.8%)、「就職」(59.2%)、「引っ越し・住宅の購入」(58.3%)、「日常の交流や交際」(37.4%)となった。



	差別がある	差別はない	わからない
Q7.3 結婚	67.8%	24.4%	7.4%
Q7.2 就職	59.2%	28.9%	11.4%
Q7.4 引っ越し・住宅の購入	58.3%	30.7%	10.3%
Q7.1 日常の交流や交際	37.4%	52.1%	9.7%

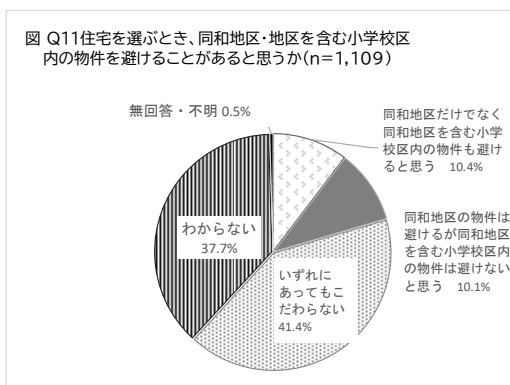
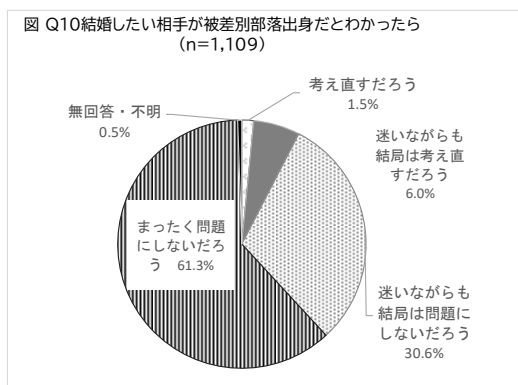
### 1-2. 「忌避的態度」(自分は差別するのか)

#### (1) 結婚・住宅(土地)

では、「自分は部落差別をするのか」すなわち、忌避的態度はどうであろうか。前問との比較ができる「結婚」「住宅(土地)」について、次のようにきいた。

「結婚したいと思う相手が部落出身者だとわかった場合、どんな態度をとるか」(【問 10】)

「住宅を選ぶとき、部落や部落を含む小学校区内の物件を避けることがあると思うか」(【問 11】)



さらに、結果を要約的に見るために、回答を以下のように合算した。

問 10 「考え直すだろう」+「迷いながらも結局は考え直すだろう」=「ともかくも考え直す」(忌避)

「迷いながらも結局は問題にしないだろう」+「全く問題にしないだろう」=「ともかくも“問題にしない”」

問 11 「同和地区だけでなく同和地区を含む小学校区内の物件も避ける」+「同和地区の物件は避けるが…小学校区内の物件は避けない」=「ともかくも同和地区の物件は避ける」(忌避)

結婚	ともかくも“考え直す”	ともかくも“問題にしない”
	7.6%	91.9%
住宅	ともかくも“同和地区の物件は避ける”	いずれにあっててもこだわらない
	20.5%	41.4%

両問の回答肢の数は異なるので、単純な比較による断定はできないものの、「結婚」「住宅(土地)」のそれぞれについて、忌避的態度をとる／とらない回答の割合を表にした。忌避的態度をとる割合は、「結婚」(7.6%)より、「住宅(土地)」(20.5%)で多い。反対に、「結婚」では「ともかくも問題にしない」(91.9%)が圧倒的多数であるのに、「住宅(土地)」の「いずれにあっててもこだわらない」(41.4%)は、その

半分にも満たない。また、「住宅(土地)」では、「わからない」(態度保留)も4割弱ある。

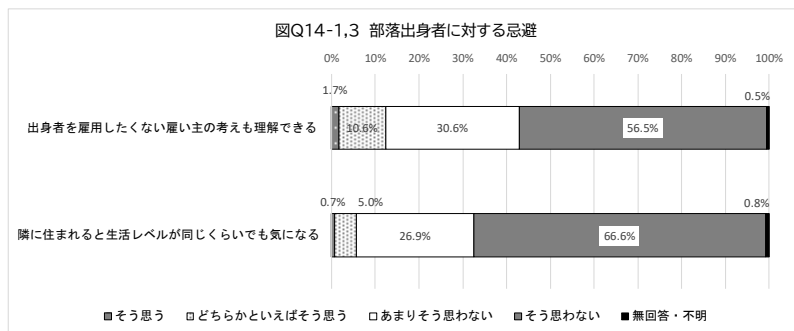
さらに、「ともかくも同和地区の物件は避ける」と回答した者には、自由回答方式で、その理由の記入を求めているが、筆者の分類では、「自分が差別を受けることを避けたい」(みなし差別の回避を含む)という主旨の回答、「家族・子どもが差別を受けることを避けたい」という主旨の回答が、それぞれ30数人、40数人あり、最もまとまっていたから、「部落に住むことによって、自分や家族が差別を受ける」と考えている者が、かなりまとまっていたことがわかった(別の著者が別稿で公表予定である)。

## (2) 職場・近隣

【問 14】のうちの2問も、間接的な、あるいは婉曲な表現をとりながら、部落出身者に対する忌避的態度を測定している。

「部落出身者を雇用したくないという雇い主の考えも理解できる」(【問 14.1】)

「私の家の隣に部落出身者に住まれると、たとえ生活レベルが同じくらいでも、気になると思う」(【問 14.3】)



	賛成	反対
雇用したくない	12.4%	87.1%
近隣居住は気になる	5.7%	93.5%

「部落出身者を雇用したくないという雇い主の考えも理解できる」「私の家の隣に部落出身者に住まれると、たとえ生活レベルが同じくらいでも、気になると思う」に対して「そう思う」「どちらかといえばそう思う」を合算し“賛成”（忌避）と答えた割合は、それぞれ 12.4%、5.7%であり、“反対”は 87.1%、93.5%である。忌避的態度を示す割合が低いことには、間接的な表現をとったことが関係しているかもしれない。

### 1-3.「差別の現状認識」から「忌避的態度」への転換

さて、「結婚」と「住宅（土地）」に関しては、「社会には部落差別があると思うか」と、「自分は部落差別をするのか」の両方を聞いているから、その「ずれ」を見ることが出来る。「社会には差別がある」と思って（あるいは知って）いても、「自分は差別をしない」者もいる一方、社会の差別を受容し、自分も「差別する」側にまわってしまう者もいるからである。その関係を図に示した。

#### 現状認識(社会)

結婚（差別があると思うか）

「ある」 67.8%  
「ない」 24.4%

#### 忌避的態度(自分)

結婚したいと思う相手が部落出身者だとわかった場合の態度

”ともかくも問題にしない” 91.9%  
”ともかくも考え直す” 7.6%

引っ越し・住宅の購入（差別があると思うか）

「ある」 58.3%  
「ない」 30.7%

住宅を選ぶとき、部落や部落を含む小学校区内の物件を避けるか

「いずれにあってもこだわらない」 41.4%  
”ともかくも同和地区の物件は避ける” 20.5%

「結婚」の場合は、差別が「ある」が7割弱だが、差別は「しない」が9割になる。だが、「住宅（土地）」では、結婚のように大きな転換がみられない。

#### 1-4. 教育経験との関係

ちなみに、「結婚」「引越し・住宅購入」において、部落「差別がある」または「差別はない」と思っている者は、それぞれ、学校で部落問題を学習した経験はどれくらいあるのだろうか。以下の表によって見ると、学校段階別の学習経験には若干の差があるが、小学校から大学までに学習した割合（右欄外）を比較すると、ほとんど差がない。本調査では、「学習せずに、偏見に基づき、差別があると思っている人」はわずかで、大多数は、学習した上で「差別がある」または「ない」と判断していることになる。

		小学校で学んだ	中学校で学んだ	高校・高等専修学校で学んだ	大学で学んだ	はっきりと覚えていない①	学校で学んだ経験はない②	回答なし③	学校で学習100-①-②-③
結婚									
差別がある(明らかに+どちらかといえばある)	n=752	35.8%	62.1%	60.4%	8.2%	10.2%	5.1%	0.7%	84.0%
差別はない(ほとんどない+ない)	n=271	37.3%	63.1%	54.6%	5.2%	11.1%	4.1%	0.0%	84.9%
わからない	n=82	34.1%	50.0%	43.9%	8.5%	13.4%	8.5%	0.0%	78.0%
回答なし	n=4	0.0%	0.0%	50.0%	0.0%	25.0%	25.0%	0.0%	50.0%
総数	n=1109	35.9%	61.2%	57.7%	7.5%	10.7%	5.1%	0.5%	83.7%

		小学校で学んだ	中学校で学んだ	高校・高等専修学校で学んだ	大学で学んだ	はっきりと覚えていない①	学校で学んだ経験はない②	回答なし③	学校で学習100-①-②-③
引越し・住宅購入									
差別がある(明らかに+どちらかといえばある)	n=646	35.6%	62.4%	62.2%	9.0%	8.8%	5.9%	0.5%	84.8%
差別はない(ほとんどない+ない)	n=340	35.6%	60.6%	53.8%	5.0%	12.6%	3.8%	0.3%	83.2%
わからない	n=114	37.7%	57.9%	45.6%	7.0%	14.9%	4.4%	0.9%	79.8%
回答なし	n=9	44.4%	44.4%	33.3%	0.0%	22.2%	11.1%	0.0%	66.7%
総数	n=1109	35.9%	61.2%	57.7%	7.5%	10.7%	5.1%	0.5%	83.7%

ところで、差別が「あると思う・ないと思う」（現状認識）と、差別を「する・しない」（自分の態度）を組み合わせると、以下のような類型ができる。

- |                              |          |
|------------------------------|----------|
| a. 差別がある(と認識) + (しかし) 差別をしない | = 積極的非差別 |
| b. 差別がない(と認識) + (だから) 差別をしない | = 消極的非差別 |
| c. 差別がある(と認識) + (だから) 差別をする  | = 差別受容   |
| d. 差別がない(と認識) + (しかし) 差別をする  | = 自己矛盾   |
| その他                          |          |

人権教育が目指すのは「差別がある」と認識しても、「差別をしない」人(a)を育てることであるが、「差別がある」と認識し、そのまま自分も「差別をする」という者(c)もいる。これらの類型別に、学校での学習経験を見ると、以下のようになる。

「現状認識+自分の態度の類型【結婚】」別×学校での学習経験

結婚	n	小学校で 学んだ	中学校で 学んだ	高校・高等 専修学校で 学んだ	大学で 学んだ	はっきり と覚えて いない①	学校で学 んだ経験 はない②	回答な し③	学校で学習 100-①-②-③
a 差別ある→問題にしない(積極的非差別)	n=684	36.5%	63.3%	62.0%	7.7%	9.9%	4.1%	0.6%	85.4%
b 差別ない→問題にしない(消極的非差別)	n=258	38.4%	64.3%	55.4%	5.4%	9.7%	4.3%	0.0%	86.0%
c 差別ある→考え直す(差別受容)	n=63	28.6%	49.2%	42.9%	14.3%	12.7%	15.9%	0.0%	71.4%
d 差別ない→考え直す(自己矛盾)	n=13	15.4%	38.5%	38.5%	0.0%	38.5%	0.0%	0.0%	61.5%
差別ある→回答なし	n=5	20.0%	60.0%	60.0%	0.0%	20.0%	0.0%	20.0%	60.0%
わからない→考え直す,問題にしない,回答なし	n=82	34.1%	50.0%	43.9%	8.5%	13.4%	8.5%	0.0%	78.0%
回答なし→考え直す,問題にしない,回答なし	n=4	0.0%	0.0%	50.0%	0.0%	25.0%	25.0%	0.0%	50.0%
総数	n=1109	35.9%	61.2%	57.7%	7.5%	10.7%	5.1%	0.5%	83.7%

「現状認識+自分の態度の類型【住宅(土地)】」×学校での学習経験

住宅(土地)	n	小学校で 学んだ	中学校で 学んだ	高校・高等 専修学校で 学んだ	大学で 学んだ	はっきり と覚えて いない①	学校で学 んだ経験 はない②	回答な し③	学校で学習 100-①-②-③
a 差別ある→こだわらない(積極的非差別)	n=248	37.1%	65.3%	66.5%	10.9%	8.9%	2.8%	0.0%	88.3%
b 差別ない→こだわらない(消極的非差別)	n=162	41.4%	68.5%	56.8%	5.6%	6.8%	3.1%	0.6%	89.5%
c 差別ある→避ける(差別受容)	n=155	38.7%	66.5%	62.6%	9.7%	6.5%	5.8%	0.6%	87.1%
d 差別ない→避ける(自己矛盾)	n=55	41.8%	54.5%	47.3%	5.5%	21.8%	3.6%	0.0%	74.5%
差別ある→わからない	n=240	32.5%	57.1%	57.9%	6.3%	10.4%	9.2%	0.4%	80.0%
差別ある→回答なし	n=3	0.0%	33.3%	33.3%	33.3%	0.0%	0.0%	33.3%	66.7%
差別ない→わからない	n=122	25.4%	52.5%	52.5%	4.1%	16.4%	4.9%	0.0%	78.7%
差別ない→回答なし	n=1	0.0%	100.0%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
わからない→避ける,こだわらない,わからない,回答なし	n=114	37.7%	57.9%	45.6%	7.0%	14.9%	4.4%	0.9%	79.8%
回答なし→避ける,こだわらない,わからない,回答なし	n=9	44.4%	44.4%	33.3%	0.0%	22.2%	11.1%	0.0%	66.7%
総数	n=1109	35.9%	61.2%	57.7%	7.5%	10.7%	5.1%	0.5%	83.7%

とくにa~dに注目すると、「結婚」では「c. 差別受容」の、「学校で学んだ経験はない」がやや多い。このことは、学習によって「差別がある」ことを知ったというより、学校外で「差別がある」と知った者が(偏見がかった情報を得ている可能性も高い)が、学習機会をもたないまましていると、「差別するのは仕方がない」という態度が形成されてしまうということではなかろうか。

しかしながら、「住宅(土地)」の場合、「a.積極的非差別」と「c. 差別受容」の間で、学校での学習経験(小学校~大学)にはほとんど差がない。つまり、「差別はあるが、差別はしない」者と、「差別があるから、自分も差別するのは仕方がない」と考えている者との学習経験には、差がないのである。

なお、「住宅(土地)」では、「d.自己矛盾」において、「はっきり覚えていない」もやや多い。

## 2. 日本型「現代的差別(modern racism)」の検討

次に、アメリカにおいて「現代的差別(modern racism)」と呼称されるようになった新たな差別言説が、日本において、とりわけ部落差別の文脈にどの程度まで「浸透」し、若者世代の意識に影響を与えているかを検討したい。

「現代的差別」とは前述のとおり、積極的差別是正措置の実施を契機に立ち現れた「差別はもう深刻な問題ではないのに、マイノリティは努力もせず差別があると主張し、要求ばかり行って不当な特権を得ている」といった言説であり、「特権を利用しようとする、ずるいマイノリティ」像を示すことで、マイノリティが社会規範から外れた存在だと主張し、排除を正当化する。またこれは、社会的な問題の解決は「公」によるより「私」的な努力によってこそ行われるべきだとする考えが基にあるという点で、自己責任、競争、能力主義が強調されるネオリベラル(新自由主義的)な社会に親和性が高い。

### 2-1. 「現代的差別」「古典的差別」を測定するための質問について

ところで、「現代的差別」は、「古典的差別」と対比的に検討を加えてこそ、その特性が明らかになると考えられるので、本調査では、この両方についての意識を探るべく、以下のような「部落・部落出身者に対する意見」を示し、賛成～反対を4件法(「そう思う」「どちらかといえばそう思う」「あまりそう思わない」「そう思わない」から1択)によってきいた。

「古典的差別」は、「劣っている」「低所得」「閉鎖的」「集団で行動」「こわい」「ふれない方がいい」といったキーワードを、「現代的差別」は「過剰な要求」「優遇」「行政・メディアの過度な配慮」「努力せず福祉に頼る」といったキーワードを使っている。これらを【問14】と、【問22】(★印)に配置した。

#### 古典的差別を想定した意見

1. 差別を受けるのは、部落出身者に劣っているところがあるからだと思う
2. 部落出身者には、所得の低い人が多いと思う
3. 部落出身者には、地区外の人に対して、閉鎖的な意識を持った人が多いと思う
4. 部落出身者は、何か問題が起こると集団で行動することが多いと思う
5. 「部落の人はこわい」と思う
6. 部落問題については触れないほうがいいと思う
7. 同和問題(部落差別)は口に出さずにそっとしておけば自然に差別はなくなる★
8. 同和地区(部落)の人びとがかたまっても住まないで分散して住めば、差別はなくなる★

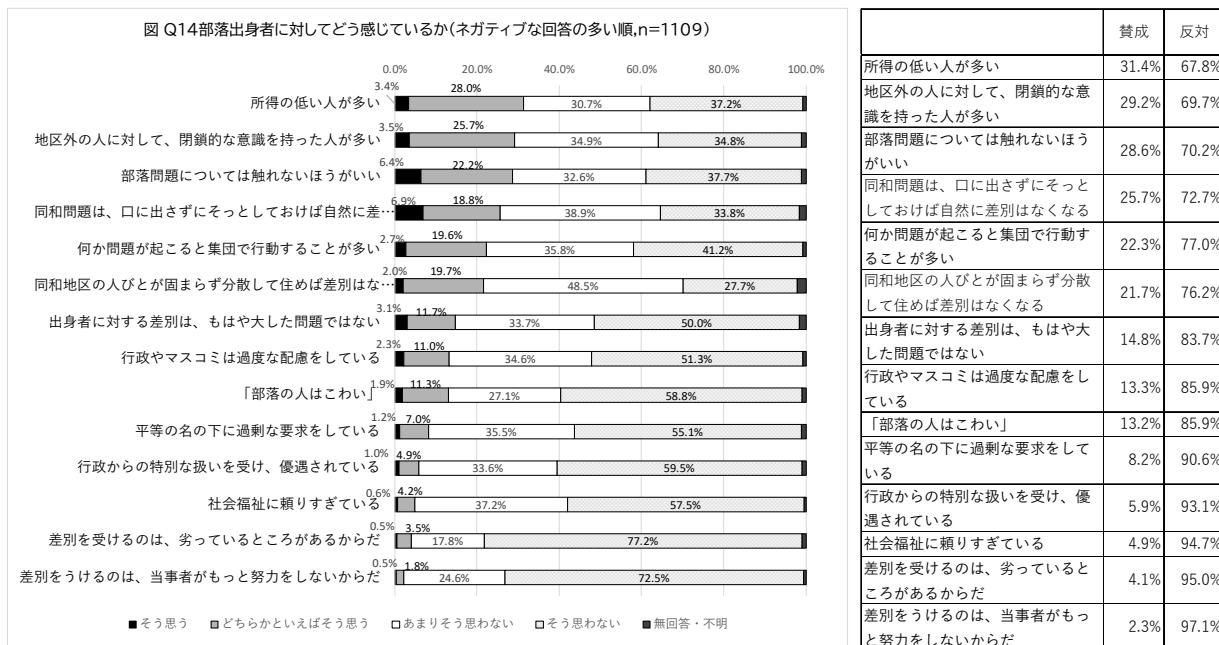
#### 現代的差別を想定した意見

9. 部落出身者は、平等の名の下に過剰な要求をしていると思う
10. 部落出身者は、行政からの特別な扱いを受け、優遇されていると思う
11. 行政やマスコミは、部落出身者に対して、過度な配慮をしていると思う
12. 部落出身者に対する差別は、もはや大した問題ではないと思う
13. 差別を受けるのは、当事者である部落出身者がもっと努力をしないからだと思う
14. 部落出身者は、社会福祉に頼りすぎていると思う



## 2-2. 部落・部落出身者に対する意識

上記の問いに対する回答結果は図・表のとおりである。いずれも、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」を合算し、ともかくもその意見に“賛成”した割合が多かった順に上から並べている<sup>5</sup>。



上位には、「低所得」「閉鎖的」「集団で行動」(あからさまに否定的なイメージ)と、「触れないほうがいい」「そっとしておけば自然になくなる」「分散して住めば差別はなくなる」(問題の放置・コミュニティの分散を支持する意見)が並び、それぞれ2~3割となっているから、大まかにいえば「古典的差別」が優勢ということになる。

これに対して「現代的差別」に関しては、「差別はもはや大した問題ではない」「行政やマスコミは過度な配慮」では、それぞれ1割を越えるが、その他の項目は1割を越えなかった。本調査の回答者においては、「古典的差別」意識のほうが優勢で、「現代的差別」意識はそれほど強くないとの印象を受ける。なお、その理由であるが、本調査報告の「基礎編」【問 2】で見たとおり、回答者の部落問題に関する知識は、歴史的な出来事が中心で、同和問題の解決のための法や政策等についての知識があまりないことが考えられる。「現代的差別」の言説は、どちらかと言えば、リベラルな法・政策等への批判の形態をとるので、これに共鳴するほどの知識がないためではないか、とも思われる。

## 2-3. 「現代的差別」「古典的差別」尺度(スコア)の作成(因子分析)

ところで、これら14の意見に対する態度を個別に検討するばかりでなく、因子分析によって、回答(変量)の背景にある潜在的な共通因子を探り、特定の共通因子から同じように強い影響を受けている質問群をまとめられないかと考えた。「古典的差別」「現代的差別」を測定するのに適した質問を絞り込むことができるかもしれない。

そこで、「そう思う」=4、「どちらかといえばそう思う」=3、「あまりそう思わない」=2、「そう思わない」=1点として各回答にスコアを与え(「回答なし」は除外)、因子分析を行ったところ、意味のある3つの因子(初期の固有値1以上)が抽出された(第1~3因子の固有値は、5.259、1.647、1.070となり、第三因子ではかなり低い)。そこで、統計的

<sup>5</sup> 図の数値(%)は小数点以下第二位で四捨五入しているため、そのまま合算した数値と、表中の数値とはわずかにずれる場合がある。

な手続きとして、このように3つに分かれた質問群を、それぞれ一貫性のある、ひとまとまりの質問群として扱ってよいかを検証したところ(内的整合性があるかを Cronbach の $\alpha$ によってみた)、第三の質問群はこれに耐えない(一貫性が低く、何らかのまとまりあるグループとして扱えない)ことがわかった<sup>6</sup>。そこで、第一、第二因子の質問群のみ注目することとした<sup>7</sup>。

回転後の因子行列<sup>a</sup>

	因子			共通性
	1	2	3	
R4部落出身者は、行政からの特別な扱いを受け、優遇されていると思う	0.734	0.242	0.156	0.622
R2部落出身者は平等の名の下に過剰な要求をしていると思う	0.660	0.217	0.147	0.505
R12部落出身者は、社会福祉に頼りすぎていると思う	0.657	0.409	0.233	0.653
R6行政やマスコミは、部落出身者に対して、過度な配慮をしていると思う	0.578	0.282	0.166	0.441
R10差別をうけるのは、当事者である部落出身者がもっと努力をしないからだと思う	0.563	0.211	0.210	0.406
R5差別を受けるのは、部落出身者に劣っているところがあるからだと思う	0.529	0.260	0.128	0.364
R9部落出身者には、地区外の人に対して、閉鎖的な意識を持った人が多いと思う	0.249	0.705	0.079	0.566
R11部落出身者は、何か問題が起こると集団で行動することが多いと思う	0.332	0.627	0.062	0.507
R7部落出身者には、所得の低い人が多いと思う	0.197	0.622	-0.007	0.425
R13「部落の人はこわい」と思う	0.412	0.527	0.139	0.468
R同和問題(部落差別)は、口に出さずにそっとしておけば自然に差別はなくなる	-0.004	-0.099	0.859	0.748
R14部落問題については触れないほうがいいと思う	0.216	0.307	0.450	0.343
R同和地区の人びとがかたまっても住まないで、分散して住めば差別はなくなる	0.146	0.031	0.419	0.198
R8部落出身者に対する差別は、もはや大した問題ではないと思う	0.242	0.108	0.418	0.245
因子寄与	2.846	2.136	1.509	6.491
累積寄与率	20.327	35.585	46.363	

「現代的差別」因子

「古典的差別」因子

因子抽出法: 主因子法 a. 5 回の反復で回転が収束しました。

第一因子、第二因子は、高い負荷量を示した質問群の内容からみて、それぞれ「現代的差別因子」「古典的差別因子」と名付けることとした。

さらに、これらをもとに、新たな変数(スコア)を作成した。各問の回答を「そう思う」=4、「どちらかといえばそう思う」=3、「あまりそう思わない」=2、「そう思わない」=1 点とし(回答なしは除外)、それぞれの質問群のスコアを回答者ごとに合算し、「現代的差別スコア」「古典的差別スコア」とした。以下、これらのスコアと、部落・部落出身者に対する忌避的態度との相関をみたい。

<sup>6</sup> Cronbach の $\alpha$  (クロンバックのアルファ)の値は、第一因子の質問群(項目数6)では0.852、第二因子の質問群(項目数4)では0.784、第三因子の質問群(項目数4)では0.627だった。

<sup>7</sup> 「『部落の人は怖い』と思う」については、2つの因子に対して高い負荷量をしめしているが、その差が0.1以上あるため、維持することにした。

### 2-3. 「現代的差別」「古典的差別」と忌避的態度の関係(相関)

	現代的差別 スコア	古典的差別 スコア
現代的差別スコア	1.000	.646**
古典的差別スコア	.646**	1.000

まず、最初に断っておきたいのは、「現代的差別」と「古典的差別」とは、まったく別のものではなく、相互に高い相関があるという点である。この点を踏まえた上で、この2つのスコアと、部落出身者に対する好感度、部落に対する忌避的態度との関係を見た。

#### 部落(同和地区)出身者に対する好感度…【問 16】

好感度低～高を1～9 (全員が回答していた)

#### 「結婚」における部落出身者に対する忌避意識…【問 10】

「考え直すだろう」=1, 「迷いながらも、結局は考え直すだろう」=2,

「迷いながらも、結局は問題にしないだろう」=3, 「まったく問題にしないだろう」=4 (「回答なし」を除外)

#### 土地(同和地区や同じ学区内の物件)に対する忌避意識…【問 11】

「同和地区の物件だけでなく、同和地区を含む小学校区内の物件も避けると思う」=1

「同和地区の物件は避けるが、同和地区を含む小学校区内の物件は避けないと思う」=2

「いずれにあってもこだわらない」=3 (「わからない」「回答なし」を除外)

	部落出身者への 好感度スコア	結婚 (問題にしない+)	同和地区や同じ 学区内の物件 (こだわらない+)
現代的差別スコア	-.166**	-.341**	-.270**
古典的差別スコア	-.191**	-.377**	-.350**

\*\*有意水準 1%で相関がある

まず、いずれのスコアも、好感度とは逆相関する(但し、結婚・住宅に関しての忌避意識との相関より、好感度スコアとの相関は弱い)。

また、いずれのスコアも「結婚における部落出身者に対する忌避意識」「土地(同和地区や同じ学区内の物件)に対する忌避意識」と逆相関する。但し、「古典的差別スコア」のほうが「現代的差別スコア」の相関よりも、わずかとはいえ強い。

### 2-4. 「現代的差別」意識を形作るものは何か

「現代的差別」「古典的差別」とは、他のどのような考え方と関連があるのだろうか。「ネオリベラリズム(新自由主義)志向」(【問 15】3 問)、「保守的政治志向」(【問 17】6 問)、「学校人権教育に対する考え」(【問 22】2 問)「メディア情報・ネットに対する考え」(【問 22】6 問)との相関をみた。回答は賛成～反対が、高(4点)～低(1点)となるようにした(回答なしは除外)。

すると、「現代的差別」にのみ、複数の項目に、0.1～0.2 の有意な相関があった(「古典的差別」には 0.1 を越える有意な相関はない)。「現代的差別」に相関がみられた項目は、「自己責任志向」、「夫婦別姓(-)」、「同性婚(-)」「愛

国心教育」<sup>8</sup>と、「差別をなくすために学校教育は重要(一)」、「ネット規制は必要(一)」、「ネット上の人を傷つける情報はしかたがない」、「ネットで叩かれる側にも理由がある」といった考え方であった。

これらをまとめると、「現代的差別」は、差別解消に向けて、教育活動やネット規制などの「公的介入」が行われることを嫌い、自己責任を重視し、ネット上で誹謗中傷やバッシングが起きても「仕方がない」と放任する態度と相関している。だが、かといって、単なる自由放任主義ともいえず、伝統的家族、愛国心を重視するような、保守的価値観とも相関することが特徴であるから、「反リベラル」とみることもできる。

なお「現代的差別スコア」も「古典的差別スコア」も、ネット利用時間(【問 19】)、部落問題に関わる知識スコア(【問 2】から合成<sup>9</sup>)とは相関がみられない。

	ネオリベラリズム志向			保守的政治志向					
	Q15.1競争志向	Q15.2自己責任志向	Q15.3反平等(格差支持)志向	R夫婦別姓も認められるべき	R早い時期に改憲した方がよい	R集团的自衛権の行使を認めるべきではない	R同性どうしの結婚も認められるべき	R小中学校での、愛国心を育てる教育は大切	R靖国神社の公式参拝には慎重になるべきだ
新しい差別スコア	-0.059	.102**	0.037	-.144**	-0.009	0.030	-.164**	.114**	-0.032
古典的差別スコア	-.097**	-0.001	-0.042	-0.048	0.045	.096**	-.067*	0.045	0.016

	学校・人権教育		メディア情報・ネットに対する考え						その他	
	R差別をなくすために、学校での教育は重要だ	Rこれまで受けた学校の人権教育は「タテマエ」が多かった	Rネット上で過激な書き込みや発言があっても…本気ではない	R差別をあおるようなネット上の書き込みには、規制が必要	Rネットに人を傷つけるような情報が載るのはしかたないことだ	Rネットで叩かれる側にも、叩かれるだけの理由がある	R大手マスメディアの報道は、信用できない	Rインターネットの中こそ、報道されない真実がある	一日平均、ネット利用時間	知識スコア
現代的差別スコア	-.225**	.078*	.085**	-.120**	.163**	.210**	.078*	0.049	-0.018	.075*
古典的差別スコア	-0.056	.076*	-0.009	-0.016	.072*	.095**	.076*	0.053	0.044	.069*

\*\* 有意水準 1%で相関がある

<sup>8</sup> なお、保守的政治志向に関しては、「夫婦別姓(一)」「同性婚(一)」「愛国心教育」だけが相関したが、これは、「現代的差別スコア」のもとになった設問群が、すべて、部落・部落出身者に関わるものであったからである。参考までに、在日韓国・朝鮮人と、部落出身者に対する好感度スコアと、保守的政治志向の相関を以下に示したが、在日韓国・朝鮮人への好感度スコアは、「集团的自衛権」「靖国参拝」などにも相関がある。これは保守的政治志向を測定する設問群に、外交・防衛等の国際関係に関わる項目を含めてしまったために、これらが在日外国人に対する意識とは相関しても、部落とは相関が出なかったためである

	保守的政治志向						
	R夫婦別姓も認められるべき	R早い時期に改憲した方がよい	R集团的自衛権の行使を認めるべきではない	R同性どうしの結婚も認められるべき	R小中学校での、愛国心を育てる教育は大切	R靖国神社の公式参拝には慎重になるべきだ	
在日韓国・朝鮮人への好感度スコア	.130**	0.024	.124**	.196**	-.117**	.145**	
部落出身者への好感度スコア	.122**	0.034	0.046	.134**	0.031	.082**	

<sup>9</sup> 【問 2】では部落問題の知識を問うため、「解放令」「同和対策審議会答申」など9項目をあげ、認知を問うている。回答に「よく知っている」=4、「少し知っている」=3、「あまり知らない」=2、「知らない」=1 のスコアを与え(回答なしは除外)、これを回答者ごとに合計し「知識スコア」とした。

### 3. インターネットについて

「現代的差別」「古典的差別」および、部落・部落出身者に対する忌避的態度と、インターネットの利用時間、およびソーシャルメディアの利用度（【Q20】<sup>10</sup>）の相関も算出した。「現代的差別」にみる「特権言説」は、インターネット上などでよく散見されるので、ネットの影響が大きいのではないかと考えたからである。その結果は次の表のとおりである。

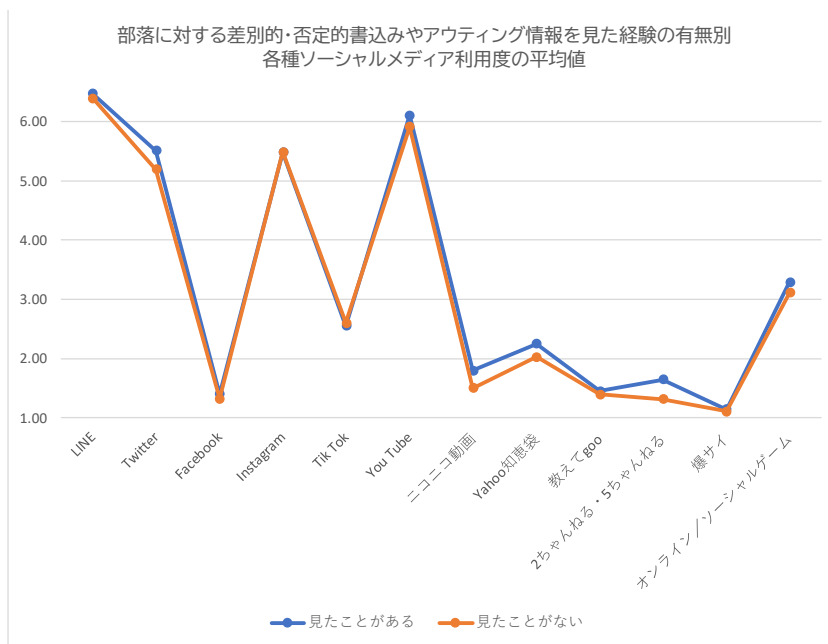
相関係数が 0.1 を越えるものもあるが、何らかの意味を見出すことは困難である。インターネットの利用時間やソーシャルメディアの利用頻度そのものが、直接的に、部落に対する差別や忌避意識に影響を与えていることは、量的には把握できない。

	ネット 利用時間	利用度 LINE	利用度 Twitter	利用度 Facebook	利用度 Instagram	利用度 Tik Tok	利用度You Tube	利用度 ニコニコ 動画	利用度 Yahoo知恵 袋	利用度 教えてgoo	ちゃんね る・5ちゃん ねる	利用度 爆サイ	利用度ワタシ ゲーム・ソシ ヤルゲーム
現代的差別スコア	-0.018	0.017	-0.019	0.019	0.030	.073*	.078**	0.031	0.025	0.036	0.045	.064*	0.026
古典的差別スコア	0.044	0.023	0.018	0.004	0.044	0.020	0.030	0.023	0.057	0.044	0.033	-0.012	0.009
結婚（問題にしない+）	0.035	-0.043	0.042	-.074*	-.102**	-.060*	0.005	0.057	-0.030	-0.031	0.018	-0.040	.121**
同和地区や同じ学区内の物件 （こだわらない+）	0.012	-0.043	-.069*	-0.019	0.046	.073*	-0.042	-.109**	-0.025	-0.009	-.071*	0.008	-.073*
社会的距離をとりたい(職場)	-0.026	-0.004	-0.032	0.032	0.029	.076*	.078**	0.013	.060*	0.043	0.058	0.026	0.001
社会的距離をとりたい(近隣)	-0.038	.076*	0.011	0.027	.072*	.082**	0.055	-0.019	.070*	0.033	0.012	.066*	-0.051

\*\*有意水準 1%、\*有意水準 5%、で相関がある

そこで、部落に関して、差別的、否定的書き込みや部落をアウトイングする情報を「見た」ことがある者と、「見たことがない」者に分け、各種ソーシャルメディアの利用度の平均値を比較してみた。「見た」者、「見たことがない」者を区別するには、【問 8】を利用し、(1)~(8)のいずれかを選択した者を「見た」者とし、(9)（当てはまるものはない）を選択したか回答しなかった者を「見なかった」者とした。すると、「見た」者は、「Twitter」「ニコニコ動画」「YouTube」「Yahoo知恵袋」「2ちゃんねる 5チャンネル」で、利用度がやや高かった(P<0.05)。

	見たことがある	見たことがない
LINE	6.47	6.39
Twitter	5.51	5.19
Facebook	1.40	1.32
Instagram	5.48	5.49
Tik Tok	2.55	2.60
You Tube	6.10	5.91
ニコニコ動画	1.80	1.50
Yahoo知恵袋	2.25	2.03
教えてgoo	1.45	1.40
2ちゃんねる・5 ちゃんねる	1.65	1.32
爆サイ	1.15	1.11
オンライン/ソ シャルゲーム	3.29	3.11



<sup>10</sup> 【問 20】では Line、Twitter など 12 のソーシャルメディアの利用度を聞いている。「全く見ない」～「1 日十数回かそれ以上」という回答に、低(1)～高(7)のスコアを与え(回答なしを除外)、これを各種ソーシャルメディアの利用度とした。

## おわりに

本稿では、人権施策の進捗と共に現れた、新しい差別の様態(「人」より「土地」に対する忌避意識が強く立ち現れること)や言説(現代的差別)が、大学生の意識に与えている影響を検討した。

### 人・土地に対する忌避意識のちがひ

まず、部落の「土地」に対する意識であるが、結婚において「人」(部落出身者)を忌避する意識よりも、より強く立ち現れることが本調査でも確認された。その理由としては、自由回答欄への記入を見る通り、「みなされる差別」(そこに住めば自分も部落出身者と間違われ、差別を受けるかもしれない、という考え)を回避する意識が、影響を与えていることがまず挙げられよう。

また、結婚(人)と住宅(土地)に関わって、「積極的非差別」グループ(社会に差別があると認識→自分は差別をしない)と、「差別受容」グループ(差別があると認識→自分も、差別をする)の間で、学校での学習経験を比較すると、結婚では「積極的非差別」のほうが「差別受容」より、学校での学習経験の割合が高いのに対して、土地では差がない。部落の「土地」に対しては、「人」に対する忌避意識とは異なる論理が働いていることがうかがわれる。さらに探索を深める必要がある。

### 現代的差別・古典的差別

本調査の対象者は、「法期限後」に学校教育を受け、インターネットの普及が進む 2000 年以降に生まれ育ったデジタル・ネイティブ世代が大半を占めた(調査時点で 21 歳以上は 5%弱であった)。そこで、とくにネットを介して、また、しばしばヘイトスピーチと共に拡散されてきた「現代的差別」言説の影響を、ある程度受けているものと予測していたが、全体として見れば、「古典的差別」意識のほうが優勢であった。

その理由として、学校で得る部落問題に関する知識は歴史が中心で、同和対策事業や、法・制度などについて学ぶことが少ないため、これらに批判的な立場を表明する「現代的差別」言説に共感するほど、知識がないからではないか、と筆者は考えた。

だが、ネオリベラルな社会において、こうした言説の影響は、今後も強まると考えられるから、決して安心していられることではない。実際、本調査では、「現代的差別」意識の強さは、差別解消のための教育やネット規制などの「公的介入」を嫌い、ネット上での誹謗中傷やハッシングを「仕方がない」と受け止め、自己責任を支持する態度と相関していることがわかった。だが、私たちの社会は単なる自由放任では成立しない。このような意識は、社会的合意により、法や制度をつくり、よりよい社会を築いていこうとする方向性とは相いれない。

なお、部落差別における「古典的差別」についても、今後の課題を記しておきたい。本調査で採用した「現代的差別」「古典的差別」の概念は、海外のレイシズム研究から提起されたものであるが、人種差別における「古典的差別」というのは、一般に、バイオロジカルで生得的な差異(例えば肌の色)を優劣に結び付ける。もちろん、これは部落差別にはあてはまらない。部落差別において「現代的差別」を論じるのなら、改めて「古典的差別」とは何かを論じる必要性も感じる。

また、基礎編で検討したとおり(【問 12】)、身近に部落出身者との出会いがないにも関わらず、部落に対する「貧しい」「閉鎖的」「集団で行動する」「こわい」といったイメージを、大学生の場合、いったいどこから得ているのかも気になるところである。

最後になるが、近年名付けられた「新しい差別」には、「現代的差別」以外にも多様なものがある。例えば、Aversive racism(回避的差別)、Color blind racismなどは、部落差別の文脈においても解釈が可能かもしれない。部落差別には「触れないほうがよい」「そっとしておけば差別はなくなる」という考えは、これまでは「寝た子を起すな」論だと一般に言われてきたが、Aversive racismと解釈することもできる。また、「部落差別なんかないし、私も差別なんかしない。あなたが気にしすぎなだけだ」といった言説は、部落にルーツのある当事者の存在を無化するという点で、Color blind racismとも重なる点が多い。今後の課題である。

#### 参考文献:

Kinder, Donald R. & Sears, David O (1981) Prejudice and Politics: Symbolic Racism Versus Racial Threats to Good Life. *Journal of Personality and Social Psychology*40(3)

McConahay, John B. (1986) *Modern Racism, Ambivalence, and the Modern Racism Scale*. FL: Academic Press.

阿久澤麻理子 (2021)「現代社会の部落差別における『属地性』」朝治武他編著『続 部落解放論の最前線』解放出版社

高史明(2015)『レイシズムを解剖する: 在日コリアンへの偏見とインターネット』勁草書房